つも大変恐縮に思い感謝の極みであった。

それにもかかわらず昨年末からの先生の御入院中は、私もまた病後回復のために南熱海温泉病院に入院中で、先生の御近況を医史学会本部からの電話で伺い、心からご案じ申上げご回復をお祈りしていたが、ついに直接にお見舞してお話出来る折もないまま、私が退院、帰京して間もなく御逝去になられたことは、今もまことに申し訳なく、残念なことであって、あらためて、感謝とお詫びの言葉を申し上げたいと思う。

長い年月の御交情を偲び、心から御冥福を祈って追悼の文といたす次第である。

小川鼎三先生を偲んで

大滝紀雄

小川鼎三先生は解剖学、ことに脳神経系統の研究、鯨類の研究、医史学の研究等、幅広い分野で活躍され、多数の立派な業績を残された稀にみる勝れた学者であった。その緻密な思考力に加えて、広い包容力をもつ偉大な人格者であったため、先生に接する人々は誰でもいい知れない魅力にとりつかれるのであった。今静かに昔を振り返ってみると、先生の物静かな態度、ゆっくり一言一言を考えながら語られる先生の言葉、お世辞もなく、人を咎めることを決してせず、しかも大事なことはピシッといわれる先生のありし日の姿が思い出される。私は一開業医の身でありながら、医史学の分野で公私共、大へん先生のお世話になった一人である。

一、順天堂史の編纂

小川先生は昭和三十七年に東大を停年退官し、順天堂大学で医史学の教授となり、日本医史学会の本部を順天堂におき、専ら医史学の研究をされた。いっぽう有山理事長の熱心な要望に応えて、かねてからの先生の念願でもあった順天堂史の編纂に着手された。

昭和三十八年五月二十一日順天堂創立百二十五周年に当り、上野の東京文化会館で記念式典が催された。小川先生は一年間にわたって種々集められた資料に基づいて「順天堂の歴史」と題して記念講演をされた。私もこれを拝聴し、要旨を記したプリントを頂いて今でも大切に保存している。先生の御高名はかねてから知っていたが、親しく先生とお近づきを願ったのは、この日が最初であったかも知れない。順天堂史の資料収集もこれを機会に本格的に始められたといえるだろう。

それから二年余り経った昭和四十年十月二十七日、御茶の水の山の上ホテルで小川先生を中心に順天堂史編纂委員会が開かれた。私も呼ばれたので出席した。当時のメンバーは元内科教授佐藤要先生、事務局の大野大氏、石塚司農夫氏、それに佐倉の篠丸頼彦氏であったかと思う。この日が委員会発足の日であった。私は当日会に出席する前に、要先生の令兄で、もと内科教授であった佐藤亨先生が順天堂へ入院中であったのをお見舞した記憶がある。

そして何時の頃からかはっきり覚えていないが、図書館の桑原善作氏、日本歴史の小島茂男氏、それに医史学研究室の酒井シヅ先生が前記メンバーに加わって、毎月一回委員会が定期的に開催されるようになった。会場は順天堂内の一室が当てられ、しばしば資料室も使われた。鈴木滋子さんがいろいろお世話をして下さった。不思議なことに毎月のように新資料が次々と発見され、小川先生は毎回それらについて解説を試みられた。ことに泰然や尚中のこれ迄知られていなかった手紙などの新資料が篠丸氏から提示された。時には順天堂史のある特定問題について関係の深い臨時委員の参加する場合もあった。

私は少人数ながら専門家が毎月集まって種々討議をしているので、順天堂史は五、六年もすれば出来上ることだと思っていた。小川先生もそう思われたにちがいない。しかし、じっさいに上巻が刊行されたのは大幅に遅れて、昭和五十五年春となったのは皆さん御承知の通りである。軌道に乗ってからじつに十五年以上の歳月が経過したわけである。

それには右に述べたような理由があったが、連綿と続く由緒ある順天堂の歴史であり、小川先生が編集責任者であれば、いい加減な記述は許されない。先生は一つ一つの事項を慎重に取り上げ、新知見は毎年四月十日に行われる順天堂祖先祭でほとんど毎回発表された。

歴代主宰者である泰然、尚中、進、達次郎の伝記も順を追って発刊された。それらはすべて新資料を採り入れ、先生の勝れた独自の視点から観察された全く新しい伝記であった。先生はこの四人の人物の中でもとくに尚中に深い関心と畏敬の念を抱いておられた。二、三気のついた点を述べておく。

それまで尚中はふつう「ショウチュウ」と呼ばれ、正式な呼称は「ナオナカ」ではないかとされていた。このほかにも「ヒサナカ」「タカナカ」とも読むことができ、一定していなかった。小川先生は明治四年南校から東校へ問い合わせた文中の「佐藤大博士の実名は何か」という質問に注目された。これに対して東校側の返答は「佐藤尚中（たかなか）」とひら仮名を付けて、辛未（明治四）二月二日南校御中と記している。この書類から先生は尚中の正式な読み方は「タカナカ」に間違いないと思われると結論された。それ以来この呼称が一般的に用いられるようになった。

外科医として有名であった尚中も晩年にはニーマイエルの内科書の蘭訳本からの翻訳に精魂を傾けていた。この内科翻訳書は『済衆録』という題名で明治十二年から尚中の死後に至るまで何冊かが刊行された。あり難いことに、尚中自筆の原稿の一部が現在残っており、朱筆の書き入れや、日付の記入があり、尚中の勤勉な努力の跡が辿れる。肺結核で熱海静養中にも、この翻訳は間断なく続けられた。このことは順天堂史上巻『佐藤尚中伝』中に克明に記されているが、私はそこに記されていないで、小川先生が何度も私達に強調して語られた言葉を思い出さずにはいられない。

それは尚中が一章節の翻訳を終ったその同じ日に、次の章節の翻訳に直ちに入っていたことである。同じ日付が章の終りと次章の始めに記されているので、はっきりそれと知れる。「現代のふつうの人間だったら一仕事終ったらほっとして、まずテレビでも見て一休みし、あとの仕事は明日にしようということになるだろう。しかし尚中先生はちがう。まさに儒夫をして立たしめるものがある」小川先生は何度も少し声をふるわせながらそう私達に語られた。これは決して「君たちしっかりしろ」というのではなくて、先生自らを戒めた言葉であった。儒夫をして……という言葉を聞いて、私は小川先生が儒夫だとしたら、此の世の中に儒夫でない男が存在するだろうかと自問自答してみた。

編纂委員会は右のように小川先生を中心に少人数で行われていただけに、お互の親しみも増し、開催日が待遠しい位だった。時には原稿を早く纏めるために、外界との雑交渉を絶つ手段として、山の上ホテルで数日間合宿をしたこともあった。別々の部屋に参考書と原稿用紙を持ち込んで時間を有効に使い筆を進めた。食事時間は一同楽しくテーブルを囲むと同時に、これが貴重な質問、討議の時間でもあった。今では懐かしい思い出となった。

また、年末には委員会終了後に忘年会が催された。その費用は先生のポケットマネーから支出されたようだったが、先生は一言もそんなことをいわれなかった。先生が歌を歌われるようなことは無かったが、気分が乗ってくると、三高の歌やドイツ語の歌のさわりがちらりと出てくることもあった。どちらかといえば世事に疎い先生のそんな姿はまことに微笑ましいものである。

立派な順天堂史の上巻は刊行されたが、教室史を主体とする下巻の発行を見ずに他界されたことは返す返すも残念であった。

二、日本医史学会

先生は順天堂医史学教授となる二年前の昭和三十五年から死去されるまでの二十四年間を日本医史学会の理事長として

務められた。内山理事長から小川理事長にバトンタッチした頃の日本医史学会は受難の時代であった。今、日本医史学雑誌の刊行状況を調べてみると巻数、号数の欠番はなく一応揃ってはいるが、昭和三十四年度と三十五年度には学会誌がただの一冊も刊行されていない。これには種々の事情があったと思われるが、日本では各大学に正規の医史学教室の置かれていないのが一大原因であったと思う。学会誌は三十六年度から三十九年度までは変則的に発行されたが、四十年度からは現在に至るまで、原則として年四回定期的に発行されている。医史学会会員数も低迷していた時代には二百人足らずであったが、昭和五十九年現在では七百五十人を突破している。

小川先生は順天堂に着任と同時に医史学研究室を開設、本部をここに置き、医史学隆盛のためにあらゆる努力を惜しまれなかった。その一つ一つを挙げればきりがないが、先生は医史学会運営充実化のほか、医学史に関する著書の刊行、医学文化財の保存、国際医学史シンポジウムの開催等に挺身された。たまたま山崎文庫が順天堂にそっくり寄贈されたのは、先生にとっても医史学会にとっても大変な幸運にちがいなかった。昭和四十四年『山崎文庫目録』が刊行され、順天堂は文字通り医史学会の中心となり、日を追って研究室は充実整備されていった。

毎月の例会は他所でも行われたが、大部分は順天堂で行われるようになった。例会の出席者数は必ずしも多いとはいえないが、熱心な人達だけが集まった。小川先生、緒方先生、大鳥先生の医史学会の三大御所が出席されるのはじつに心強い限りであった。それだけでも私達後進に対する力強い励みとなったが、三先生の追加発言はいつも貴重で味うべきものが多かった。

日本全国で毎年一回開催される日本医史学会総会並に講演会に小川先生は必ず出席された。理事評議員会に始まり、最終の講義の終了するまでの三日間、先生は誰よりも熱心に議事進行を見守られた。いつも最前列中央の講演のきき易い場所に位置どられ、適切な追加発言をされた。会長講演のさいは必ず司会をつとめられた。

何時のことであったか、私が順天堂の医史学研究室を訪ねた時、先生は私に向かって「総会を一度横浜でやらなければ

いけないね。石原（明）君がやってからもう十五年も経つかな。その節はよろしく願いますよ」と語られた。私はまさか自分が会長を引き受けようとは思っていなかったので、「そうですね、一度やらなければいけませんね」と軽くお答えしたのを覚えている。これはやがて実現することになった。

私たち横浜だけでなく、神奈川県在住の医史学会会員にとって忘れることの出来ないのは、昭和五十八年五月二十日から三日間にわたって横浜で行われた第八十四回日本医史学会総会である。しかも、これは小川先生が出席された最後の総会となっただけに、私達の感銘はきわめて強烈であった。

いつか先生から横浜で開催したいといわれてから暫くたったある日、たしか何処かのパーティーの席上だったと思うが、先生は私に「横浜で開催するときは、あなたが会長を引き受けて下さい」といわれた。私は一開業医の身分であるし、県下には学会の先輩もいることだし、横浜には横浜市大もあることなので、お引き受けすることにはやや逡巡を覚えた。先生は多くを語らず、「あなたが引き受けて下されば、私は安心していられる」とポツンといわれた。決して命令的な口調ではないが、私に全幅の信頼をするような言葉に対して、私は先生の期待に応えなければならないと思った。また先生は軽く微笑みながら、「私の元気なうちに是非横浜でやりたい」ともいわれた。先生はうすうす前立腺腫瘍の進んでいることを自ら察知されている様子だった。私はその日以来もし横浜が実現すれば、どういう風にしたら会を成功させられるかを考え、あれこれ腹案をねってみた。

いよいよ横浜開催が本ぎまりとなってからは、横浜、川崎、横須賀等の会員に声をかけて、毎月小委員会を開いた。会場は横浜市健康福祉総合センター（横浜市医師会館）、事務所は横浜市立大学医学部、演題は余り多くなければ是非一会場にしたかったが、多くて一部を二会場に分けて使用した。講演会場の一部に展示室を設けて、石原明コーナーを用意する。最終日の午後は見学に当て、見学は開港資料館と三渓園、外人墓地の三カ所にしぼった。ヘボン展の開催を五月の学会を中にはさんで開港資料館で開催して貰うこと。細郷横浜市長を名誉会長とし市、県からも学会補助金を頂いた。会は

八分通りは成功したと思う。県下の会員の皆さんの協力はまことに素晴らしいものがあった。微に入り細に入って学会運営をスムースに導くように努力して下さったことに対し深く感謝せずにはいられない。お蔭で全国から参集された二百五十名の会員の先生方にも大方の満足をして頂けた。

私の頭にはいつも小川先生から、全部委せるといわれた言葉がこびりついて離れなかった。学会期間中、会長の私は小川理事長と殆ど行動を共にした。先生はいつも私を引き立て励まして下さった。学会講演中も、開港資料館でも、また三渓園や懇親会のくつろいだ席上でも御一緒出来たことは私にとって終生忘れられない無上の光栄であった。しかも横浜が先生の出席された最後の総会となってしまった。後で順天堂を訪れたさい、「横浜では本当に御苦労さんでした」とねぎらいの言葉を頂いて、私の肩の荷はすべて降りたような気がした。

三、思いつくまま

先生は「あり難い」という言葉を好んで使われた。ふつうは単なる感謝の意味に用いられるが、先生は「有り難い」「めったにない」「貴重だ」というオリジナルの意味で使われることが多かったようである。したがって、先生の「あり難い」という言葉の中には深い感謝の念がこめられていたような気がする。

私の出版した小著『医学の歴史散歩』の序文を先生にお願いした。先生は「自分乍ら割り合い上手く書けたと思うが、適当に直して下さい」といって手渡された。この序文のお蔭で、私の小著には大変箔がついたように思う。頂いた原文は大切に保存してある。

先生の著作や別刷にサインをして下さる時、「鼎」の一字を書いて下さることがあった。四字の姓名の漢字の中で先生の最もお好きな文字であったのだろう。

先生の亡くなられた四月二十九日、私はたまたまスペイン旅行中でバルセロナにいた。順天堂の医史学研究室にもと勤

務していた保田扶佐子さんが同地へ留学、石版刷りの勉強をしていたので、フレーミングの碑を見たり、由緒ある病院の話を聞いたりしていた。小川先生が病気で入院していられるのでその後どうだろうと二人で案じていた頃だった。先生の訃報は帰宅後初めて知り、十三日の葬儀に参列することが出来た。おごそかで盛大な葬儀であった。葬儀終了後何処かに大きな穴の空いたような、うつろな寂しさを抱きながら家路へと向った。

小川鼎三博士を悼む

富士川英郎

小川鼎三博士とはじめてお会いしたのは、昭和三十五年十一月、築地の西本願寺であった亡父の歿後二十周年記念の会においてであった。その会には三枝博音氏も来られ、私の従兄にあたる桐原葆見氏なども出席していたが、小川博士もそこで、それらの諸氏とともに立って、父についての短い話をされたのであった。

だが、私が小川博士と親しく接して、そのお話を直(じか)にいろいろ伺えるようになったのは、ここ十数年来、日本医史学会の例会にたびたび出席するようになってからのことである。昭和四十四年の春、東大を停年退職して、日本のドイツ文学界の前線から退いた私は、身辺に閑暇を得ることが多くなったのを幸いに、たびたび医史学会を訪れるようになった。それはかねてから「門前の小僧」というようなわけで、自分の研究というべきものは何もなかったが、日本の医学史に興味をもっていたからであるが、こうして私は医史学会の理事長をしておられた小川博士や、長老の緒方富雄、大鳥蘭三郎の二博士にもお目にかかる機会をしばしばもち、また、酒井シヅさんとも相識った。